解釈の仕方も非常に丁寧で用例も多い。その点細かい所から調べる場合にはこの辞典の果す役割は大きいように思う

又角川古語辞典に於ては単語のあらゆる角度から考慮されていて、文献用例なども古いものが多い。要は調べる目的によつて適否を判断すべきだと思う。これらの結果より知りうることは、その語の持つ意味、発生過程・変化・転化と追求すればするだけの問題があること、そして一つの辞典が必ずしも完全なものではないということである。

附　記

ここに揚げたものは、八項目とも資料が必要な訳で、限られた紙面では理解されにくいかと思う。参考資料は、論文の方をみて載きたい。

源氏物語と植物

――植物使用の効果――

古閑素子

はしがき

本文は、先に提出した卒業論文『源氏物語と植物』を「国文研究」の記事用として、要約したものである。

卒業論文は、先ず物語に現われた全部の植物及び木や草・花等植物関係の言葉の前後の文を摘出し、これに文学面からと植物学上からの考察をなし、それらを資料として、研究の主目的を「登場の植物は、物語にどんな効果を与えているか」に置いて総論を纏めた。しかし、本文は、原稿枚数の制限もある為、資料の分は一切省略し、総論もその一部を省略、或いは削除した。

文中引用する源氏物語の原文は、「日本古典文学大系、源氏物語、一～五巻」により、原文の所出巻名は、〈桐壺〉のように記し、作者紫式部は、「作者」と略称した。

○　源氏物語の植物

源氏物語五十四帖中に使われている植物は、若菜・竹等のような総合名称や月の桂などの想像のものも含めて**百十余種**である。（細部の表省略）

この百十余種は、万葉集の約百六十、枕草子の約百四十に比べるとその数は少いが、万葉集に於ては長年月の間に各階層の人々が、植物に関連して、日本全国に於て、見たり、聞いたり、感じたりして千五百余首中に詠みこんだものであり、枕草子のものは同時代の人の作ではあるが、自然趣味を中心とした随筆であるので、植物の数だけを比較するのは適当でない。

源氏物語における植物は、前記両文献より数こそ少いが

時には数巻に亘る数場面を繋ぐ骨組ともなり、また、人物の表現に、人々の心理描写に、或いは場面の展開等に大きな役割を果し、物語の重要な構成要素になつていることに特長がある。

また、二十余に亘る花・木・草等の言葉は、時には、桜とか、梅とかの植物そのものと代えて巧みに用いられ、文を簡潔化したり、変化を与えたり、余韻を持たせたりする効果を挙げている。「花」を語幹とする言葉の如きは、六十に近い。（細部の表省略）

○　植物名のつく人達

源氏物語に現われる人物は、「尼君十余人」の如きも一人と数えて、四百八十余人、歴史上や架空の人物六十一を加えると合計は約五百四十余人である。そして、物語に実在の四百八十余人も、境遇が異なり、官位、地位が変わり或いは対話上の敬称その他によつて同一人でも多くの呼称がある。例えば、光源氏には、「御子、若宮」に始まつて「故院」に至るまで四十三、その内、内大臣、殿、大将など一般的なものを除いた「光る君、源氏、六条院」等源氏固有のものだけでも十三の呼称があり、紫の上には「若君若草」から「なき人」まで三十六、（内「紫の上、春の上」など固有のものは十二）あるなど前記四百八十余人の総ての呼称は数え切れない程のものである。

この多数、且は煩雑な人物の名を、優雅に、また簡明にし、更に読者にその人物のイメージをさえ持たせるものに植物名を附していることがある。

光源氏が、理想の女性をめざして教育し、妻の座に据えた、源氏に次ぐ物語中のヒロインに、作者は「**紫の上**」の名を与えた。源氏は、北山において「……むらさきの根にかよひける野辺の若草」〈若紫〉の歌に見るように、まだ若草であつた紫の上を見初めた。紫の上は、源氏の実母桐壺更衣の俤がある義母、また恋人でもある藤壺（中宮）の姪に当る。その頃はまだ、紫の色、紫草の根に通える若紫であつた紫の上は、その後〈御法〉の源氏五十一才の八月に亡くなるまで源氏と並んで物語の中心人物となつた。作者が、「紫の上」の名を附したのは、紫のゆかりの故もあろう、紫色が服制上臣下最上のものであると同じく、物語中最上の女性だとの意味もあろうが、「紫の上」の名をつけた為に、読者は「紫」の言葉を見、また聞く度に、このヒロインの存在を強く意識させられる。

桃園式部卿の宮の女を「**朝顔の宮**」という。孫王女の身分で賀茂の斎院に選ばれる程の宮は、恐らく第一流の皇室女性であつたろう。源氏も、朝顔の「匂ひ殊にかはれる」を見ては、その枝を折つて奉り、『見しをりの露わすられぬ朝顔の花のさかりはすぎやしぬらん』と消息し、宮の容貌の衰えるのさえ心配する程の執心振りであつたが〈朝顔

〉、宮は遂に源氏の意に従わぬ程の人柄でもあつた。

朝顔は、現在ではありふれた花であるが、物語の成立頃は、渡来薬草の牽牛子が、漸く観賞植物になり初め、まだ新奇な珍らしい花として貴ばれていたであろう。今日においても朝顔の宮といえば、朝顔の花容のような楚々たる姫宮が想像される。当時の人は我々以上に新しい輸入植物朝顔の花のように清く貴い姫宮と思い浮べたであろう。

花散里は、夕霧が、「(父源氏が)浜木綿ばかりの隔差隠しつゝ、何くれとなくもてなし紛らはし給ふめるも宜なりけり」と評する位の醜女である。しかし、また、「心ばへ斯様に柔らかならむ人こそ相思はめ〈以上乙女〉と思う程立派な人柄であつて、源氏も長男の夕霧のみならず、孫の次郎君、三の姫君の養育という大任さえこの夫人に任せる程重く見ている。花散里は染色・裁縫の技にも長じ家庭的な女性でもあつた。「花散る」といえば、淋しさを感じるが、作者は、この女性の人格を枝上豊艶に咲き誇る花よりも、庭に散り敷く静かな花弁の美しさに似たものとしてかく名付けたのではあるまいか。

光源氏が、始めて逢つたその明け方に見た常陸の宮の姫は、「居丈の高う、を背長」だつただけでなく、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、さきの方すこし垂りて、色づきたる事、ことの外うたてあり」〈以上末摘花〉と思う程醜い偉大な赤鼻の持主であつた。この姫を「**末摘花**」と呼ぶ。。末摘花は紅花の別名、紅花は紅花、「末摘花」はいうまでもなく姫の赤鼻をもぢつた綽名である。源氏は、「階隠のもとの紅梅」が色づいても、『くれなゐの花ぞあやなくうとまるゝ梅のたち枝はなつかしけれど』〈以上末摘花〉と詠む程、赤といえば赤鼻の姫を思い出し、恐怖さえしている。しかし、直接に揶揄することはなく、他人にその醜貌を知らせることもなく、却つて同情を寄せ、一度契つた人として最後まで生活その他の面倒を見ている。末摘花に関連して出ている言葉は、紅・紅花・紅などで、末摘花の名を聞いても赤鼻の醜悪を感ずるより先に、女性の化粧に不可欠の紅を思い、次で源氏のヒューマニズムを思い、源氏の漁色に対する嫌味も緩和するのである。

父鬚黒の大臣と不縁になつた母北の方と共に我が家を去りゆく姫は、悲しみの歌『……真木の柱は我を忘るな』を真木柱の干割れに挿し込んで〈真木柱〉、「**真木柱の姫君**」の名を得た。菅公の『東風吹かば……』の故事と趣きを同じくするこの姫の悲しみは、菅公の伝説を知る今昔の読者の胸をうつであろう。

その他、植物名のついた人には、「荻の葉・大和撫子・若草」等もある。また、栽植する植物の名が宮中建物の名となり、ひいては、そこに住む人々の名となつた、「桐壺の更衣・桐壺の御方・藤壺・藤壺の宮・梅壺」等もある。

これらの女御・更衣等の名が、淑景舎の更衣とか、飛香舎の宮とか、凝華舎の御方とかの如き唐風の呼び方よりも女性の筆になる源氏物語にふさわしく感じられるのはいうまでもなかろう。

源氏物語中、植物名を持つ人物は、

桐壺の更衣、藤壺と藤壺の宮（四人）、大和撫子、撫子若草、初草、荻の葉、朝顔の姫宮（宮）、夕顔、花散里帚木、梅壺、末摘花、紫の上（若紫・紫・紫の君）、真木柱（の姫君）、紅梅の御方

であるが、これらの人々が総て女性であるとは、これらの女性に優雅な感じを与えるのみならず、不知不識の間に物語全般にも柔らか味を感じる効果を挙げている。作者の狙いもまたそこにあつたのではなかろうか。

男性中、若君夕霧を撫子と呼び、また、藤中納言、藤宰相等藤がつく人があるが、前者は愛子の意味であり、後者の藤は藤原氏の藤であつて、前記とはその意味が異る。

○　植物による人物表現

愛子を撫子や大和撫子などの言葉を以て表現する例は多いが、源氏物語の作者は、後の玉鬘に「**撫子**」を用い、その母夕顔を撫子の古名「**常夏**」を用いて表現した。

夕顔は契りも浅い儘に、なにがしの院であえない最後を遂げ、源氏にとつて露忘れられぬ思い出の多い女である。作者は子の玉鬘に現代名（平安時代の）撫子を、母親夕顔に古名の常夏を用いることによつて、自ら親子の関係を感じさせている。常夏の「とこ」は、契る意味の「床」にもかゝれば、常にの意味の「とこ」にもかゝる。夕顔とは契りあり、常に思い出づる女の意も兼ねた巧みな命名といえよう。

夕顔の子の玉鬘は、後には「**山吹**」に擬せられる。玉鬘が西の対に移つて間もなくその部屋に渡つた源氏は、玉鬘の美貌について、

「さうじみも、あなをかしげとふと見えて、山吹にもてはやし給へる御かたちなどいと花やかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく、隈なく匂ひきら〳〵しく見まほしきさまぞし給へる」〈初音〉

と思い、夕霧も、

「昨日見し（紫の上の）御けはひにはけ劣りたれど、みるに笑まるゝさまは、たちも並びぬべくみゆ」

る程で、

「八重山吹の咲きみだれたるさかりに、露のかゝれる夕映ぞ、ふと思ひいで」

ている。〈野分〉

年の暮に源氏はその容貌にふさわしい装束を選んで、各婦人達に贈つた。源氏が

「くもりなく赤き山吹の花の細長は、かのにしの対にた

蔭に育つが、その花の色の美しさはいつもくらべ、[illegible]

「くもりなく赤き山吹の花の細長は、かのにしの対にたてまつれ給ふを」

紫の上は、見て見ぬ振りをしながら玉鬘の容姿を思い合わすのだつた。〈以上玉鬘〉

即ち、源氏・紫の上・夕霧三人共玉鬘を山吹に見たてゝいる。更に、

三月になりて、六条殿の御前の藤・山吹のおもしろき夕ばえを見給ふにつけても、まず見るかひありて居給へりし御さまのみ思し出でらるれば、……『思はずに井手の中道へだつともいはでぞこふる山吹の花』顔に見えつつ」〈真木柱〉――源氏

さうじみも「あなをかしげ」とふと見えて、山吹にもてはやし給へる御かたちなどいと花やかに……〈初音〉――源氏

かの見つるさきぐのを、桜（紫の上）・山吹（玉鬘）といはば、……〈野分〉――夕霧

と何れも山吹に見たてゝいる。

玉鬘は、物語中でも最も恵まれない悲惨な環境に育ちながら、総ての困難を切り抜け、成長した後は、貴婦人として他に劣らぬ美容と才智を持ち、源氏も心から懸想する程の女となり、母となつては愛情こまやかな賢母として子供の養育をする等、物語中でも特殊な性格を持ち美事な行動をした人である。その人にたとえる山吹は日当りよりも木蔭に育つが、その花の色の鮮かさは人の心をひき、振り返らせる程の美しさで、恰も玉鬘の生い立ちや容姿や性格にも似たものがある。作者は玉鬘を描くに当つて、玉鬘の経歴と性格は山吹に似たものだと考えたのであろう。

桜は花の女王とされ、古来日本人に親しまれて来た。ヒロイン紫の上が桜に擬えられるのは当然であろう。

『面影は身をも離れず山ざくら心のかぎりとめて来しかど』（源氏）

『あらし吹く尾上の桜散らぬまを心とめけるほどのはかなさ』（尼君）〈以上若紫〉

と贈答された歌が、紫の上が「桜」になぞらえられる始めであるが、源氏が北山に行く時の「山の桜はまださかりにて」の叙景や、北山を去る時の『宮人と行きて語らむ山ざくら…』の歌も、ただに叙景や述懐としてゞなく、若紫を桜にたとえる一つであろう。

若紫は、二条院に移り「紫の君」となつた。「いとも美しき片生」ながら「何心もなくて物し給ふさま、いみじうらうた」き紫の君は、「無紋の桜の細長」を「なよらかに着なして」いた。〈末摘花〉

源氏の妻となつた「紫の上」は、六条院の春の園に住む。野分の朝、父源氏の命で見舞に来た夕霧は、東渡殿の辺りで、「見とほしあらはなる廂の御座にゐ給へる」「もの.にまぎるべくもあら」ぬ紫の上を見て、

「気高く清らにさと匂ふ心ちして、春のあけぼのの霞の間より、おもしろきかば桜の咲きみだれたるを見る心地……」

がし、明石の姫が藤の花ならば、「見つるさきの〳〵の」紫の上は桜だと思つた。＜以上野分＞また、六条院寝殿女三の宮の所で婦人方の合奏が行われた折の紫の上は、「花といはゞ桜にたとへても」という容姿であつた。

その翌日紫の上は急に重態となつた。死亡の噂さえ聞いた巷の人の間には、「かく足らひぬる人は、かならずえ長からぬことなり」「なにを桜にといふ古事もあるは……」など、うちさゞめいたのであつた。＜以上若菜下＞

源氏の妻という地位・美貌・尊敬と憧憬、これらを万人の愛する桜にうつし、そしてまた北山の「若紫」から「紫の上」の晩年まで桜に擬えているが、死後も二条院や六条院の人々は、事ある毎に、「春の桜は、げに長からぬにしも、おぼえまさる物となむ」＜匂宮＞と生前の紫の上を偲んで語り合うのであつた。

紫の上が愛孫匂宮に、自分の愛する「紅梅と桜は、花の折〳〵に心とゞめて、もてあそび給へ」と生前から遺言して譲り、匂宮は、この桜を「まろが桜は咲きにけり」＜以上匂宮＞といつて愛し、二条院で浮舟の母北の方の目に映つた匂宮は、「いと清らに、桜を折りたる様し給ひて」＜東屋＞いたことなど、匂宮と桜の関係が多いのは、紫の上を桜にたとえた余韻であろう。

花散里は、屢々「橘」を以つて表わされている。源氏が麗景殿の妹の三の君（花散里）を訪れようと中河の辺りを過ぎると橘とゆかりがある郭公が鳴いて渡る。女御の邸に着くと「近き橘の薫り懐しう匂ひて」郭公がまた鳴き渡る。源氏は、『橘の香をなつかしみ郭公花散る里をたづねてぞとふ』と「忍びやかにうち誦じ給ふ」のであつた。姉女御もまた、『人目なく荒れたる宿はたち花の花こそ軒のつまとなりけれ』との給つた。＜以上花散里＞橘にかよう花散里という源氏の気持がよく表われている。

「卯月ばかりに……月さし出でたり、」源氏が花散里の邸に赴く途中、風のまに〳〵いい薫りがする。花散里の「橘に変りてをかしければ、さし出で給へるに」＜以上蓬生＞、そこは末摘花の常陸の宮邸であり、橘の花散里ではなかつた。源氏は、花散里と橘とを堅く結びつけ、行く道々も思つていた。

六条院の庭造りにおいても、源氏は花散里の町「北のひんがしは、……卯の花咲くべき垣根をことさらに渡して、昔思ゆる花たちばな……などやうの花くさ〳〵を植ゑ」た。＜乙女＞

橘云々には、古今集の『五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする』の意を引いてよく使われるが、花散里の場合も例外ではない。花散里の名の意味はこうで

あろうかと先に考察したが、重ねて考えると物語こあらっ

賢木、花散里、蓬生、公風、明頁、夕霧、藤袴、真木柱、

あろうかと先に考察したが、重ねて考えると物語にあらわれる花散里の性格は、家庭的な、何物をも包容する暖い心の持主であり、その存在を特別に意識させる事はしないが何かあればその人を思い出さずにはいられない様な人柄である。それは恰も橘が左程目立たぬ小さい花ながら、強烈でないやわらかな馥郁とした香を持つのに似ていると思われる。橘の白い花弁が一面に散り敷き、ほのかな香りが漂つている様、それが花散里の性格ではなかろうか。

○ 植物名の利用

（後人によるもの）

源氏物語成立後、本文にはないが、物語解読の便宜上後の人の付した**通称の人名**も少くない。植物関係にそれを求めると、死歿時の巻名によつたもの（例えば葵の上、柏木）、活躍する巻名によつたもの（紅梅）、歌中の句を用いたもの（落葉の宮、軒端の荻）、その住いに栽培している植物名によるもの（桃園兵部卿の宮、夕顔）などがそれで、藤壺の如く、藤壺中宮、藤壺女御などと同じ藤壺でも同一人と誤らない様明らかにしたものもある。

巻名も、文中の歌によるもの、詞によるもの、住いの名によるもの等、五十四帖中、植物関係は、

桐壺、帚木、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、蓬生、松風、朝顔、常夏、藤袴、真木柱、梅枝、藤裏葉、若菜上・下、柏木、紅梅、椎本、早蕨、宿木

と二十五に達する。

人名について見ると、比較的若死した柏木でも、原文中の称呼は二十二あり、内十三は他の人物の称呼と同一であり、残りの九の中においても他と紛れないものは僅かに「岩漏る中将」の一つぐらいであるが、柏木の通称によつて如何に後学の者が物語研究に便宜を得ているか計り知れぬものがあり、これも作者が一部の人ではあつてもその性質をも推測し得るような植物名を付けた影響によるものであろう。

○ 花・紅葉の宴

源氏物語には、祝賀に、社交に、公私にわたり花・紅葉につけ紅葉の賀・花（桜）の宴・藤の宴・萩の宴等が催されたことが記されている。菊の宴がないのは、当時まだ宴の対象となる程菊の園芸が発達していなかつた為であろうか。

朱雀院に行幸の**紅葉賀**において、主人公光源氏は大きくクローズアップされた。その試楽における源氏中将の舞は帝が頭中将のに比し格段に優れている旨仰せられ、藤壺も「おほけなき心なからましかば、ましてめでたく見えまし」と思しながら、「殊に侍りつ」と聞え給ふ程の出来映えであつた。行幸の当日は猶更で、源氏は試楽の日と同じく

青海波を舞つたが、挿頭の紅葉が散ると左大将は、「御前なる菊を折りてさしかへ」た。〈以上紅葉賀〉帝は御満足その他の方も源氏もまたこの時のことが永く忘れられない。

後の花の宴で、春宮はこの「御紅葉の賀のをりおぼし出でられて」「かざし給はせ、切にせめたまは」している〈花宴〉。下つて、冷泉帝が紅葉のさかりに上皇朱雀院と御一緒に六条院の源氏邸に行幸になつたのは源氏三十九才の秋で、紅葉賀から二十一年を経ているが、源氏自身なお当時を忘れず、「朱雀院の紅葉の賀の例のふることおぼし出でら」れた程である〈藤裏葉〉。十八才の源氏が「正三位し給ふ」栄誉を得たのも紅葉賀の「その夜」〈以上紅葉賀〉のことである。

紅葉賀の巻の読者は、庭に散り敷く紅葉の錦、梢から舞い落ちる紅葉の美を眼に浮べると共に、その紅葉の中で舞の袖を翻す若き日の源氏のあで姿を想像出来る。作者は、この情景描写に当り、たゞ紅葉の黄や紅の色のみを用いず菊を配し、「いひ知らず吹き立てるもの、音どもにあいたる松風」のあたる常盤の松の色を配し、舞の名もインヂゴ（藍）色を思わせる青海波を選び〈以上紅葉賀〉、種々の色を含む情景の中に紅葉を浮き上らせ、紅葉と共に舞う源氏の動きを出している。

花の宴の一つに、「二月の廿日あまり、南殿の桜の宴させ給ふ」た「桜の花の宴」がある〈花宴〉。「紅葉賀」の折の様に、大仕掛の御宴ではないが、ここでは御宴に臨んだ藤壺中宮、弘徽殿女御の心中の葛藤が大きく描かれている。また、源氏が、朧月夜と初めて逢い、この関係が発展してやがては源氏の須磨下りの原因ともなることがこの宵起つている。

源氏は、須磨の配所で、「南殿の桜は盛りになりぬらむ一年の花の宴に……」〈須磨〉と当時を懐しみ、薄雲女院崩御に際しては二条院の御前の桜を御らんじては、花の宴のをりなど思し出」で、「今年ばかりはとひとりごち給ひ」〈薄雲〉、花の宴に出座あつた在りし日の藤壺中宮を偲んでいる。朱雀院は春宮としてこの宴に啓せられたが、後に冷泉帝の桜の頃、朱雀院行幸の際春鶯囀が舞われると、「昔の花の宴のほどおぼし出でて」「またさばかりの事見てむや」〈乙女〉との給わしている。この花宴の記事は、宴そのものだけでなく、源氏と朧月夜との関係、須磨・明石落ち等の序ともなつているといえよう。

花宴後間もなく、三月の廿日余り、右の大殿の邸の弓の結の後には、**藤の花の宴**があつた。源氏は弓の案内には応じなかつたが、四位の少将の迎えもあり、帝の御勧めもあつて、「御装などひきつくろひ給ひて、いたう暮るゝ程にまたれてぞ渡り給ふ」た〈花宴〉。作者は、この宴を設けることによつて、源氏が先に弘徽殿の細殿に立ち寄り、三

の口に行つてふと袖をとらえた女、即ち、後の朧月夜の身元を明確にする機会を与え、朧月夜との関係の発展、それ以後の波瀾の序となし、物語に変化と文を出す素地を作つている。〈藤裏葉〉の藤の花の宴は、内大臣の私宴で、内大臣一家と、その婿たるべき宰相夕霧のみの集いである。

祖母大宮の許で育つたいとこ同志の夕霧と雲井の雁は、幼い時から相思の間柄であつたが、雲井の雁の父内大臣の不理解で長年その恋を果し得ない。しかし、内大臣が娘の婿として周囲の男性をながめると夕霧に勝る者なく、遂には夕霧に許さざるを得ず、その許す機会がなとうかゞつていた。作者は、この内大臣の心情を、

ここらの年頃のおもひのしるしにや、かのおとゞも名残なくおぼし弱りて、はかなきついでのわざとはなく、さすがにつきづきしからんと思すに〈藤裏葉〉

と記している。内大臣は、藤の花のさかりに宴を開き、それを機としようと企て、息柏木を案内に立てる。夕霧の父源氏は、「思ふやうありてものし給へるにやあらむ……」〈藤裏葉〉といつて、親心から自分の御料の直衣と下襲を着せて夕霧を送り出した。夕霧が雲井の雁を許されて、長年の恋を成就したのはこの宴の夜であり、作者は、巧みに藤の花に恋のピリオドを打たせている。

冷泉帝は女二の宮が薫に降嫁の「明日の日とての日、藤壺にうへ渡らせ給ひて**藤の花の宴**せさせ給ふ」「おほやけわざにて、あるじの宮の仕うまつり給ふにはあらず「〈宿木〉即ち、皇女降下に際する御別れの公式宴を開かせられた。上達部・殿上人が集い、親王達も集り、楽所の人々も召され、参加の人々の奏楽もあつた。この盛大な宴で最も面目を施したのは婿薫で、帝から御盃も、御歌も賜つた。

しかし、作者は、このめでたい宴に、嘗て女二の宮の母藤壺女御に懸想し、女御が入内、女二の宮が生まれ長ずるに及んでは、その二の宮を得んと思つていた紅梅右大臣を列席させ、その傷心の状を描き、物語に抑揚をつけることを忘れていない。

○ 前　栽

源氏物語所出の前栽は、庭先に植えた草木の種類や状態だけの叙述でなく、人々の心理、生活の状態や情景、人物の描写等に用いられている。主なものを用途別にすると次のようである。

(一) 心理描写

〈桐壺〉 御前の壺前栽のいとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍びやかに……

更衣死去後、桐壺帝傷心の情態で、御覧になつている前栽のおもしろき盛りと反対。

〈夕顔〉 ほどなき庭に、ざれたる呉竹、前栽の露は、猶

かゝる所もおなじごときらめきたり。
源氏が夕顔と共に見た五条夕顔の仮住いの庭、源氏は庶民の生活を知つた。
〈夕顔〉　御前の前栽かれ〳〵に虫の音も鳴きかれて……かの夕顔のやどりを思ひ出づるもはづかし。
夕顔死後二条の院に引きとられた右近の感慨。
〈紅葉賀〉「胸のやるかたなきをほど過ぐして大い殿へ」とおぼす。御前の前栽の何となく青み渡れる中に、常夏の花やかに咲き出でたるを折らせ給ひて、
藤壺の生んだ若宮を、御身の幼い時そつくりだといわれた後の源氏の心境。
〈葵〉　君は西の妻の勾欄におしかゝりて、霜枯の前栽見給ふ程なりけり。……「雨となり雲となりにけむ今は知らず」とうちひとりごちて、頬杖つき給へる御さま
葵の上死歿後の源氏傷心の有様。
〈薄雲〉　秋の雨いと静かに降りて、御前の前栽の色々みだれたる露のしげさに、御袖も濡れつゝ……「前栽どもこそ残りなくひもとけ侍りにけれ……あはれにこそ」とて、柱によりゐ給へる夕ばえ、いとめでたし
斎宮女御里帰りの際、源氏は前栽の花を見る儘に、自らの感情を前栽の花によせて口にした。
〈朝顔〉　あなたの御まへをみやり給へば、枯れ枯れなる前栽の心ばへもことに見渡されて、のどやかに眺め給ふらむ御有さま・かたちも、いとゆかしく哀にて……
桃園の宮の女五の宮と話しながら、源氏は気持も眼も朝顔前斎院に向けている。
〈朝顔〉　しをれたる前栽のかげ心苦しう、遣水もいとゝたくむせびて、池の氷もえもいはず凄きに、童べおろして雪まろばしせさせ給ふ。
朝顔前斎院のことで紫の上は不興、源氏は御機嫌直しに大困りする、雪まろばしも源氏の考えた御機嫌直しの一策。
〈常夏〉　おまへに乱れがはしき前栽などもうゑさせ給はず、撫子の色をとゝのへたる唐の大和の笆いとなつかしく結ひなして
他の婦人は春夏秋冬の庭を作つたが玉鬘のは撫子一色である。玉鬘の性格の一端がうかゞえる。玉鬘は嘗て撫子とも呼ばれた。
〈若菜下〉　遣水・前栽のうちつけに心ちよげなるを見いだし給ひても、あはれに今日まで経にけるを思ほす。
二条の院で病気療養中の紫の上の心境。
〈横笛〉　うち荒れたる心地すれど、あてにけたかく住みなし給ひて、前栽の花ども虫の音しげき野辺とみだれたるゆふばえを見わたし給ふ。
故柏木邸は荒れたが、故柏木の夫人落葉の宮の生活は……夕霧が訪れた時の前栽の有様。夕霧が後に宮と結婚

する前提の気分が十分察しられる。
〈夕霧〉 前の前栽の花どもは心にまかせて乱れあひたるに……いで給はん心ちもなし。
小野の山荘に落葉の宮を訪ねた夕霧の心境。
〈幻〉 七月七日も……まだ夜深うひとところ起き給ひて……前栽の露いとしげく……いで給ひて『たちばなのあふせは雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ』
紫の上死去後、傷心の源氏の七夕の夜の感慨と歌。
〈匂宮〉 お前の前栽にも、春は梅の花の園をながめ給ひ秋は……物げなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯の頃ほひまでおぼし捨てずなど
薫の薫りに何とか追いつこうとする匂宮のあせり。香をたくばかりでなく前栽の花の香をさえうつそうとしている。
〈宿木〉 かれ〳〵なる前栽の中に、尾花の物より殊に手をさし出でて招くがをかしう見ゆるに
匂宮は、妻中君への薫の手紙でやきもきしている。嫉妬心から尾花も中君を招く薫の手に見えた。この後匂宮は『ほに出でぬ物思ふらし篠すゝき…』と詠んだ。

㈡ **生活状態の描写**

〈帚木〉 ゐ中家だつ柴垣して、前栽に心とめて植ゑたり
中河の紀の守邸。
〈夕顔〉 御心ざしの所には、木立・前栽などなべての所に似ずいとのどやかに、心にくく住みなし給へり。
故春宮の六条御息所の生活。
〈末摘花〉 …前の前栽の雪を見たまふ。ふみあけたる跡もなくはる〳〵と荒れわたりて、いみじうさびしげなるに
末摘花邸の荒れた様。
〈明石〉 木立・立石・前栽などの有様……「心のいたり少なからむ絵師はえ書き及ぶまじ」と見ゆ
明石入道の浜辺の館。
〈明石〉 前栽どもに虫の声をつくしたり
明石入道の岡辺の館。
〈蓬生〉 木草の葉もたゞ凄くあはれに見なされしを、遣水かきはらひ前栽のもとだちも涼しうしなして
源氏の心遣いで、常陸の宮（末摘花）邸の手入れ。
〈松風〉 前栽どもの折れふしたるなどつくろはせ給ふ。
大井の里の明石の上の住い、源氏の心遣いで手入れ。

㈢ **情景及び人物描写**

〈夕顔〉 前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひ給へるさま、げにたぐひなし。
六条御息所の見た源氏の姿。
〈須磨〉 前栽の花いろ〳〵咲き乱れおもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて佇み給ふ御さまの……この世の物とも見え給はず

自分が思いに沈めば皆も心細いだろうと須磨の謫居で心遣いする源氏の姿。

〈松風〉　物どもしな〳〵にかづけて、霧の絶間にたちまじりたるも、前栽の花に見えまがひたる色あひなど、殊にめでたし

桂院に泊つた源氏の出発の有様で、こゝではかずけ物を前栽の花にたとえている。

〈野分〉　南のおとゞにも前栽つくろはせ給ひける折にしも、かく吹き出でて

この文は野分の惨害をはつきりさせる。

〈藤裏葉〉　前栽どもなど小さき木どもなりしも、いとしげき陰となり

夕霧新夫婦が住むことになつた祖母故大宮の三条殿の庭

二人は嘗て此処で祖父母の膝下に育つた。

〈柏木〉　前栽に心いれてつくろひ給ひしも、心にまかせて繁りあひ

柏木死去後の一条の宮の荒れ方である。夕霧は屢々訪れる。

〈御法〉　すごく吹き出でたる夕暮に、前栽見給ふとて脇息によりゐ給へるを、院わたりて見たてまつり給ひて

紫の上は病気療養中、源氏はその小康状態を見て喜び、「今日はいとよく起き居給ふめるは。この御前にてはこよなく御心もはれ〳〵しげなめりかし」という。

〈総角〉　まぎるゝことなくあらまほしき御すまひに、御前の前栽ほのかには似ず、おなじ花の姿も木草の靡きざまも殊に見なされて……起きおはしましけり。

母女三の宮の三条の宮焼失後、薫は六条院に移り住んだ。

〈東屋〉　こなたの廊の壺前栽のいとをかしう、色々に咲き乱れたるに……端近くそひ臥して眺むるなりけり

匂宮は二条院で新しい女童を見、次で浮舟を見た。

〈東屋〉　端の方に、前栽みるとて居たるは、いづくにか劣る、いと清げなめるはと見ゆ。

常陸守の北の方が見た少将の姿。

〈東屋〉　なぐさめに見るべき前栽の花もなし

匂宮の好色わずらわしく、三条わたりに隠れた浮舟の庭如何にもあわれである。

〈手習〉　造りざま、故ある所の木立おもしろく、前栽もをかしく故を尽したり。

浮舟を引きとつた貴い身分の尼の庵の有様で、尼の高貴さがよくわかる。

以上をみると、前栽の様子・植物の種類等自然のミニュチュアとしての前栽の模様が書き表わしてあるだけでなく源氏物語の人々は前栽を眺め、物を思い、傷心を慰し、或いは悲しみを倍し、また時には前栽を舞台として恋を育て恋の葛藤の芽をのばしていたことがわかる。

前記摘記には、〈乙女〉の六条院の四季の前栽は別項に掲げるので、〈野分〉の「中将の下襲か、御前の壺前栽の宴もとまりぬらむかし」は、単なる行事のことなどで省いた。また、物語中にある桐壺・藤壺・梨壺・梅壺等の前栽が、桐、藤等であり、「明日とての日、藤壺にうへ渡らせ給ひて藤の花の宴せさせ給ふ」〈宿木〉た藤壺の藤が、薫から今上の御かざしに折つてまいらせたことなども、物語における前栽が、夫々の役割を果しているものといえよう。

○ 四季の草木

六条の院には、春の上（紫の上）、夏の御方（花散里）秋好中宮（冷泉院の后の宮、後の人のつけた通称）、冬の御方（明石の上）春夏秋冬四季の婦人が住み、その各々の町には、四季夫々の前栽が植えられた。〈乙女・胡蝶・野分〉の記述から、その品種を摘記すると、

季	住む人	町	前栽の品種
春	光源氏 紫の上 （春の上）	辰巳 （南東）	春の花の木（数をつくす） 五葉・紅梅・桜・藤・山吹・岩躑躅・苔・柳 （秋の前栽を交ぜる）
夏	花散里 （夏の御方）	丑寅 （北東） 東の面	夏の木のかげつくるもの 呉竹・森の様な木・卯の花垣・花橘・撫子・薔薇・くたに（くたには、木丹、即ち、くちなし？） （春秋の木草を交ぜる） 菖蒲（馬場あり）
秋	冷泉院の后の宮 （通称・秋好中宮）	未申 （南西）	秋の野をつくる（もとの山あり） 紅葉の木ども 撫子、紫苑
冬	明石の上 （冬の御方）	戌亥 （西）	（北面築きわく） その隔ての垣にから竹・しげき 松の木（あさ顔） 菊・龍胆・われは顔なる柞原・名も知らぬ深山木ども

これらの品種は、四季それ〴〵にふさわしいものであるが、注目すべきは、紫の上の庭には、「**秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり**」、花散里の庭には、「**春秋の木草その中にうちまぜ**」とあり、秋好中宮と明石の上にないことであつて、これは婦人達の身分に関連しての源氏の希望を表わしたものと思える。

秋好中宮は、一の院の御子前坊の子で、帝の孫、現在は中宮で四婦人中最高の地位。紫の上は、先帝の御子三条式部卿の宮の娘で、これまた帝の孫、源氏現在の第一夫人。花散里は父母こそ不明であるが麗景殿女御の妹で現在源氏の第二夫人。源氏は、出生地位の劣れる紫の上には秋好中宮の秋の前栽を、花散里には、中宮の秋の木草と紫の上の春の木草をまぜ植えて、身分の劣れる分を補わんとしたのではなかろうか。明石の上は、母系で中務の宮の曾孫、父系で大臣の孫に過ぎず、所謂たゞ人であり、従つてその町も「北のおもて築きわけて」、また「その隔ての垣」も設けたのであろう。たゞ「**われは顔なる柞原**」は、四婦人中子があるのは明石の上だけで、「われ一人が母である」という誇らしい気分を表わしていると思える。また、「**をさ〳〵名も知らぬ深山木どもの木深きなど**」も、その女房達が中将の君とか、中務、式部などという名もない田舎育ちであることを意味するものであろう。

○　春秋優劣論に始まる一連の物語

六条の院の庭には、様々の植物が植えられるが、〈薄雲〉で源氏は、二条の院に里帰り中の斎宮女御（秋好中宮）に、「春の花の林、秋の野のさかりをとり〴〵に人争ひ侍りける」「いづかたにか御心寄せ侍るべからん」と**春秋優劣論**を持ちかけ、「狭き垣のうちなりともその折の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覧ぜさせんと思ひ給ふるを」と**造園の意志**を述べている。源氏が三十二才の秋であり、六条の院完成の二年前である。

「しづかなる御住まひを「おなじ広く見どころありて、こゝかしこにておぼつかなき山里人などをも集へ住ません」の御心にて」「六条京極のわたりに中宮のふる宮のほとりを四町をしめて」**造営を始め**たのは、源氏三十三才の時であつた。紫の上が、父式部卿の宮の五十の御賀も同じくするならば「珍らしからん御家にて」と工事を急がせて、**つくりはてられた**のは源氏三十四才の八月であつた。**造営の企画から完成**まで二年、物語の巻は〈薄雲〉から間に〈朝顔〉を置き、〈乙女〉の巻末に至つている。

六条の院の造営が終り、春の上の紫の上は、「春の御しつらひは、この頃にあはねど」の秋である為、彼岸の頃に源氏と共に急ぎ移転、花散里は紫の上にそひて、秋好中宮

はそれより五、六日過ぎに、冬の方明石の上は神無月に移つた。作者は移転時期も四婦人の季節によく合致させている。

秋である。中宮は早速に、『**心から春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ**』の消息と共に、御箱の蓋に秋らしい色々の花・紅葉を取りまぜ、濃き紫の袙、紫苑の織物をかさね、赤朽葉の羅の汗衫と何れも秋の色彩の服装をした女童に届けさせた。紫の上は、『風にちるもみぢはかるし春の色を岩根の松にかけてこそ見め』との文を、御箱の蓋には苔を敷き、美事な造り物の五葉の枝につけて返したが、源氏は、「この紅葉の御消息いとねたげなめり。**春の花ざかりにこの御いらへはきこえ給へ**。この頃紅葉を言ひくたさんは、立田姫の思はん事もあるを。**さし退きて花のかげにたち隠れてこそ強き言は出で来め**」と忠告した。秋好中宮と春の上のこの遣取は地の春秋の争いである。

〈以上乙女〉

紫の上の春の園では、百花繚乱の「三月の二十日あまりの頃ほひ」、紫の上は「**唐めいたる舟**」を「**おろしはじめさせ給ふ**」た。この日、源氏からも中宮の御ましを勧誘したが、中宮の御身分ではそう軽々しく御出ましも出来ず、招きに応じたのは中宮の女房達だけであつた。女房達は、華麗な舟おろしの行事を、翌日「げに春の色はえおとさせ給ふまじかりけり」と「花におれつゝ聞え」かわしたし、中宮は、秋の町で、春の園の賑いを「**物へだてて、ねたう聞し召し**」たのである。中宮と紫の上の二度目の春秋戯である。

紫の上が舟おろしの日取りをこの日にしたのは、翌日が「中宮の御読経のはじめ」であり、後記の演出の効果を一層大きくしようとする考えがあつたことは、舟の装ひも「いそぎそうぞかせ給ひて」とあることによつても知られる。

翌日の**中宮の御読経始め**に当つて、紫の上から仏前へ供えられた花は、銀・金の瓶にさした桜と山吹であり、「鳥・蝶に装束きたる童」達は、「御前の山ぎはより漕ぎ出でて中宮の御前に出づるほど風吹きて瓶の桜」はすこし散つた。中宮から童べどもへの禄は、桜と山吹の細長であつたし、『花園の胡蝶をさへや下草に秋まつ虫はうとく見るらん』との紫の上の消息をお届けしたのは中将夕霧、中宮は夕霧に「ふぢの細長そへて女の装束かづけ給」ひ、「かの**紅葉の御返り**なりけり」とほゝえんで消息を御覧あり、「きのふは、ねに泣きぬべくこそは、『こてふにも誘はれなまし心有て八重款冬(やまぶき)をへだてざりせば』」との御返りがあつた〈以上胡蝶〉。春秋の争いはこゝでやつと終つている。

なお紫の上の春の園に植えてあつた山吹は、舟おろしの日美事に咲き匂い、招かれた中宮の女房達は、この美事な

山吹に寄せて歌を詠み、山吹に擬らえられる西の対の玉鬘に「中の思ひに燃えぬべき若君達など」〈胡蝶〉は、夜を徹しての遊びにその歓を尽したのである。

以上は、春秋優劣論に始まつて、中宮御読経の日のことまで、読者をして少しの退屈も感ぜしめない程変化がある一連のストリーであり、更に**山吹に擬せられる玉鬘に関するストリーの開幕**でもある。（植物による人物表現参照）そして、これらの全場面に活躍し、各場面を繋いでいるのは、人物と色々な植物である。

○　物語の文をなす植物

源氏物語においては、一場面に出た事はその場限りでなく、次々に展開されて行くことが多く、おのずから文となる。植物がその繋ぎの役をなしているものの例を挙げてみる。㈠幼い匂宮は、病弱の紫の上の「私が亡くなつたら」との問いに対し、「父帝、母明石女御より祖母上が好きです、祖母上死んではいけませんよ」と答え、紫の上から対の前の紅梅と桜を譲られる〈御法〉。

紫の上の歿後、匂宮はこの桜を「まろが桜が咲いた、帳を立てたら散るまい」といつて、自ら名案だと思う。源氏は宮の言葉を聞き、「馴れ聞えん事も残り少しや……」と涙ぐむと、宮は、「いやな事だ、祖母上と同じことを仰せになる」と伏目になつて、泣き面をかくした〈幻〉。

㈡　玉鬘邸で、桜の細長の大君と薄紅梅の中君が碁を打つている時、兄左近中将は桜の枝を折つて来て「御身達が小さい時、この**桜を**私のだ、私のだと**争つた**ことがあるが父は大君のだ、母は中君のだといつたのが、御身達に気に入らなかつた様だ」と懐旧談をする。姉妹は桜を賭けて勝負の後、中君が勝ち、夫々味方した女房達、童のなれきまでが、賑かに歌の応答をする。その後、大君は、冷泉院の御息所となり院の寵愛が深いが、先に入内の方々から怨まれ、大君への思慕が叶わなかつた帝は御気嫌が悪く、玉鬘の気苦労は絶えない。一方玉鬘は、院の御懸想を忌んで院に参ることも出来ないが、蔭の事情を知らぬ大君は、昔の桜の争いでも母は中君に味方をなさつたが、その名残りに、今も私をお構いにならぬと怨む様になる〈竹河〉。

㈢　〈梅枝〉の「二月の十日、雨すこし降りて」の後は、御まへちかき**紅梅**……さかりに、**色**も**香**も……**花**をめでつゝおはするほどに……ちりすぎたる**梅の枝**につけたる御文……しろきには**梅**を彫りて……（歌）『**花の香**は……散りにし**枝**にとまらねど……』……**紅梅襲**の……その**色**の紙にて……御前の**花**を折らせ給ひて（……歌）『**花の枝**にいとゞ**心**を染むるかな人のとがめん**香**をばつゝめど』

とある短い文の中に、梅関係の詞が十三も出るが、梅・紅梅の詞は僅かに四回、而も実物は紅梅と梅が枝だけで、他の二回は彫刻の模様と襲の色目であり、殆んどが花や枝で代用されているにも拘らず、読者の心は梅に引きつけられ後の歌の「花の枝」が朝顔の君を意味することさえ気付かぬ程になつてくる。

(四) 〈若菜上〉の蹴鞠の記事における、

御階の間にあたれる**桜**のかげによりて、人々**花**の上も忘れて……**桜**の直衣のやゝ萎えたるに**花**の雪のやうにふりかゝればうち見あげて、しをれたる**枝**すこしおし折りて……**花**乱りがはしく散るめりや。「**桜**は避きてこそ」などのたまひつゝ

も同じ例である。

(五) これと反対に、竹の場合は、「竹・から竹・くれ竹・なよ竹・わか竹」と色々と使いわけ、〈乙女〉の六条の院の庭造りにおいては、同じハチクを、花散里の庭のは「くれ竹」とし、明石の上の住いには、「から竹」としている如き例もある。

作者は物語執筆に当り、大きな構成を考える一方、次の段階においてはその仕組みに色々の工夫をこらし、小さくは言葉のいいまわし（修辞）にも細心の注意を払つている。それらが、物語全般を通じて美事な文（あや）をなしているのである。物語は文字を目で見るだけでなく、読めば耳からも入る。同語の重複を避けて、音韻的な効果を挙げることにも留意されていることがわかる。

○ 引歌と植物

源氏物語成立の頃は、和歌に通ずることは上流社会や文化人の必須の素養であり、和歌そのものが言葉でもあつたと思える。作者が物語中に引いた一句も、当時の読者は作者の言わんとする所を直ちに理解し得たであろうし、歌の要所を捉えて簡潔に書き現わされた方が返つて興味をそゝり、強烈な刺戟となつたかも知れない。

(一) 引歌には**植物関係**のものが多いが、こゝには**桜関係**のみを摘記してみる。〈花宴〉ほかの散りなむと教へられたりけむ

見る人もなき山里の桜花ほかの散りなん後ぞ咲かまし（古今・伊勢）

〈薄雲・柏木〉 今年ばかりは

深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け（古今）

〈若菜上〉 桜は避きてこそ

春風は花のあたりをよぎて吹け心づからやうつろふと見む（古今）

〈若菜下〉 なにを桜にといふ古事もあるは

待てといふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひま

さまし（古今・古今六帖）

〈柏木〉　あひみん事は
春ごとに花の盛りはありなめど逢ひみんことは命なりけり（古今）

〈幻〉　おほふばかりの袖求めけん人よりは大空におほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ、（後撰）

〈匂宮〉　春の桜はげに長からぬしも
残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中はての憂ければ（古今）……意をとる

〈竹河〉　咲く桜あれば散りかひ曇り
桜花散りかひ曇れ老いらくの来むと言ふなる道まがふだに（古今）

〈竹河〉　散りなむのちの形見に
桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむ後の形見に（古今）

〈椎本〉　春のつれ〴〵
思いやれ霞こめたる山里の花待つほどの春のつれ〴〵（後拾遺）

〈早蕨〉　主なきやどの
浅茅原の主なき宿の桜花心やすくや風に散るらむ（拾遺）

〈浮舟〉　見れども〳〵飽かず
春霞たなびく山の桜花見れどもあかぬ君にもあるかな（古今）

㈡　物語中の文には直接出ていないが、**引歌に植物が出ている**ものがある。例えば、ヘタ顔の（空蟬）「益田はまことになむ」（源氏）「生けるかひなきや、誰が言はましごとか」の応答は、『ねぬなわの苦しかるらん人よりも我ぞ益田の生けるかひなき』（拾遺集）中の「生ける甲斐なし」の語、そして空蟬の心情を表わしており、益田の池の「ぬなわ（蓴）」が蔭にかくれている。

〈浮舟〉の『「誘ふ水あらば」とは思はず』という浮舟の言葉も、『佗びぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらば往なんとぞ思ふ』（古今集）中の一句を使っており、「誘う水があつても浮草の様に、その方に往こうとは思わない」浮舟の心情をいとも簡潔に表わしている。

㈢　引用しているのは、和歌中の句だけではく**漢詩からの**もある。白居易、長恨歌の「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉」や「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」などが使われていることはいうまでもない。

帝は、女二宮を薫に下す御気持があり、薫を碁の相手にされ、「よき賭物はありぬべけれど軽々しくはえ渡すまじきを何をかは」と仰せになる。お負けになると、「ねたきわざかな、まづ、今日はこの花一枝ゆるす」と宣わす。薫は、「御いらへ聞えさせで、下りておもしろき枝を折りて、まゐ」つた。〈宿木〉この一段は、皇女御降嫁の御内諾であるが、これは、和漢朗詠集、恋・紀斉名「聞得園中花

養艶、請君許折一枝春」の趣旨の小説化といえる。

以上は、極く一部の例であるが、和歌・漢詩の引用は、文の簡易化よりもむしろ詳しく書かれぬ為に、物語の興味を増し、物語を派手なものとしている。

○ 色彩と植物

源氏物語には、白・黒・赤・青（今日の緑）・紫等現代の色名もあるが、襲の色目と共に植物名の色名が多く用いられている。

(イ) 茜、葡萄、くちなし、蘇芳、丁字（香染）、縹（月草、露草）、橡、紅（紅花）、紫、（山）藍

(ロ) 棟、卯の花、女郎花、柑子、（浅、萠）葱、栗、胡桃、萱草、桜、紫苑、檜（皮）、藤、柳、山吹

等があり、その内(イ)の項は染色原料名がその儘色名となつている。物語中の色名、襲の色彩等の大部は植物の名をそのまゝ色彩名としているが、作者は、植物、着物の色、襲の色目等をうまくミックスし、時には漸層法によつて大きな効果を挙げている。

(一) 野分で、夕霧が秋好中宮を見舞うと、中宮は女童達に籠の虫に露飼わせられていたが、その童達は、「紫苑・撫子こき薄き袙どもに女郎花の汗衫などやうの時にあひたる」ものを着て露を飼い、また「撫子などのいとあはれげに吹き散らさるゝ枝ども」をとつて来る。吹き来る風は、「紫苑ことゞに匂」っている〈以上野分〉。読者は、この文を読んで、実際の植物と着物の色、風の香りとを分かちかねる心持がするであろう。

(二) 〈胡蝶〉の舟おろしの日、紫の上の庭には桜・山吹・藤が咲き匂つていた。翌日の中宮の御読経始めに、紫の上からは桜、山吹が仏前に奉られ、それを捧ぐる鳥・蝶の女童達は、中宮から桜襲・山吹襲の細長を賜り、中宮の許へ御使いに参つた夕霧には、「藤の細長をへて女の装束かづけ給」うた。こゝでも生植物の色どりと着物の色が渾然としている。

右は主な例であるが、その他においても舞の組の装束の色を別ち〈藤裏葉の行事〉、或いは舞人の装束と周囲の植物の色との対比をうまく描き出して〈若菜下、住吉詣で〉おり、それらも多くは、植物や植物名の色どりの装束などである。

○ 文の構成と植物

源氏物語においては、屢々その修辞において**漸層法による効果**を挙げているが、これにもまた植物が用いられていることが多い。

(一)(イ) 年たちかへるあしたの空の気色……数ならぬ垣根の

うちだに……

(ロ) ましていとゞ玉をしける御前は、庭よりはじめ見どころ多く、みがきまし給へる御方々の有様、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ

(ハ) 春のおとゞの御前、とりわきて梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ。さすがにうちとけてやすらかに住みなし給へり〈以上初音〉

作者のいわんとする所は、(ハ)であり、紫の上の住いは極楽浄土の如く、紫の上は、庭の梅の香の如く競争者もなく安らかに住んでいるというにあるが(イ)(ロ)の文が如何に(ハ)を強烈に感じさせているかいうまでもない。

(二)(イ) 御まへちかき紅梅さかりに、色も香も似るものなきほどに、螢兵部卿の宮わたり給へり

(ロ) 花をめでつゝおはする程に

(ハ) 前のさい院よりとて、ちりすぎたる梅の枝につけたる御文もてまゐれり

(ニ) 同時に頼んであつた香も届けられ、二つの瑠璃の杯に入れ、その一つの「しろきには梅を彫りて……なよびやかになまめかしくぞし給へる」

(ホ) 朝顔前斎院の文には、『花の香は散りにし枝にとまらねど……』とあつた

(ヘ) 源氏は、使の者に「紅梅襲の唐の細長そへたる女の装束、かづけ給ふ」た

(ト) 御返りもその色の紙にて御前の花を折らせ給ひてつけさせ給ふ」。更に

(チ) 御硯のついでに、『花の枝にいとゞ心を染むるかな人のとがめん香をばつゝめど』と書いた〈以上梅枝〉。

作者のいわんとする所は、(チ)の朝顔前斎院に対する源氏の気持を表わした歌であるが、(イ)〜(ト)によつて深刻強烈なものになつている。

(三)(イ) 常陸の宮の姫君末摘花の邸は荒れている。たまに立ちよる兄禅師も浮世離れした聖で「しげき草・蓬をだにかき払はむ物とも思ひより給はず、かゝるまゝに浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒を争ひて生ひのぼる」

(ロ) 霜月ばかりになれば……朝日・ゆふ日を防ぐ、蓬・葎のかげにふかう積りて、越の白山思ひやらるゝ……

(ハ) 案内を乞うた惟光も、「昔の跡も見えぬ蓬の繁さかな」と源氏に報告する程で、

(ニ) その状態を聞いては、末摘花に懸想する源氏さえ、「『尋ねても我こそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を』とひとりごち給ふ」のだつた。

(ホ) しかし、流石は源氏で、「下部どもなどつかはして、よもぎ払わせ」周囲の板垣などの修繕をさせた〈以上蓬生〉。

(イ)から(ホ)まで、末摘花邸の蓬であるが、作者の考えは結局はその様に落ちぶれた姫も見棄てない源氏のやさしい心

を表わさんとするにある。叙景の詞を積み重ねるだけでなく、それ〳〵に変化を持たせ、㈡において最高調に達せしめ、㈱で蓬を払わせる源氏の温情を出している。

㈢㈠　柏木亡き後、落葉の宮の住む一条の宮の荒れ方は、「こゝかしこの砂子うすき物のかくれのかたに、蓬も所得がほなり」という有様である。

㈡　夕霧は、一日落葉の宮から一管の笛を贈られ、母御息所は、「これなむ、まことにふるき事も伝はるべく聞きおり侍りしを。かゝる蓬生にうづもるゝもあはれに見給ふるを」との言葉をそえられた。

「蓬生にうづもるゝもあはれに見給ふるを」という御息所の言葉で、この笛の由緒ある尊いものであることが表現されているが、㈠の「蓬も所得がほなり」は、「蓬生の……」の効果を一層大にしている。同じ漸層法によりながら、前例㈡は五度辞句を重ねているが、この㈢の例は二度重ねただけでこの様に効果を挙げている。

○　作者紫式部と植物

紫式部は、その作品源氏物語に多くの植物を用いているが、**その知識はどうして得た**であろうか。

式部は父の任地越前にも赴いた。きつと、その往復の道々で、また越前での生活中に京と異つた各種の植物がその眼に触れ、或いは、太宰府に勤めていた兄、筑紫路にいたという親友の便りや話からも得る所が少くなかつたろう。しかし、主な生活本拠である京近郊・家庭・宮庭におけるものが知識の基礎であり、中でも文献、特に和歌によるものは多いと思われる。

ともあれ、総じていえることは、作品源氏物語中に見る**植物の生態等の記述は正確**であり、時には作者にして始めて為し得るような詳細・また繊細なものもあることである。

舟おろしの日は、三月の二十日あまり（陽暦四月下旬で一般の桜は散る頃）であつた。作者は、この時季違いに就いて、「ほかには盛り過ぎたる桜も今はさかりにほゝゑみ」と辞り、柳がまだ芽をふかない正月廿日（陽暦二月中旬）婦人方の合奏の場における女三の宮の御方の姿を描写するには、この季節違いを辞るのに、「二月の中の十日許の青柳のわづかにしだり始めたらん心地して」〈若菜下〉という詞を用いている。（なお、紫式部日記には、「二月ばかりのしだり柳の様したり」というこれに似た文句がある）。

物静かな小野の山荘の辺りで、夕霧の眼に触れたものは「枯れたる草の下より、われひとりのみ心長う這ひ出でて露けく見ゆる」龍胆であつた。「九月十余日」〈夕霧〉（陽暦十月中旬）頃開花、這う龍胆はツルリンドウである。時期と合つた、簡潔なその品種、その生態の美事な書き表

わし方である。

「**花はかぎりこそあれ、そゝけたる藥などもまじるかし。**人の御かたちのよきはたとへむかたなきものなりけり」〈野分〉との一文は、玉鬘の美容を花に譬えたものであるが園芸家・植物学者等その道の専門家は別として、花の美を藥まで調べ、これこそ完全美の花とこのように断ずる人が幾人あろうか、また、筆を執る程の人にしても、花の美をかくまで詳しく書き表わし得る人があろうか。

作者は植物に詳しい。且つ、叡智を以て鋭く観察し、巧みな筆によつて、植物を物語中に活躍させている。前記、藥の観察と使用の如きは、その極致といえよう。

○ むすび

源氏物語が固文学史上でも、また、世界文学上でも誇るべき不朽の一大ロマンであることは、私が今更諜々するまでもないが、以上は植物に関する面からみた源氏物語である。

豊富な知識と鋭い観察力の所持者である作者は、巧みな筆致で物語を書いた。植物の面においてもまた然りで、物いわぬ植物も、物語中の恋の成行に、人と人との葛藤に、人物の栄枯盛衰に色どりと潤いとを与えている。

源氏物語は、一千年もの昔に書かれた。しかし、今日我々がこれを読む時、旧新の用語の相違というハンディキャップがありながらも、なお今日に草せられたかの様な新鮮な感じを抱くのは、物語中に織りなされる人と植物の深いつながりや密接な融け合いがその一役を買つているからであろう。

作者紫式部は、源氏物語中に、実に巧みに植物を使つている。幾多の物語中でも、源氏物語程登場植物がその効果を挙げているものはないのではなかろうか。

「金閣寺」に表われた美

山本弘美

(一)

『金閣寺』は昭和三十一年一月から十月まで、『新潮』に連載された三島三十一才の時の長編小説である。これは昭和二十五年七月二日早朝に起つた金閣寺放火事件が、素材となつている。作者と小林秀雄氏との対談によると、作者は事件の詳細や犯人である青年僧の経歴などを綿密に調査していることが分る。事実、主人公に与えられている条